

イエスならどうするか

このところルカによる福音書だけに記事がある特殊記事を取り上げることで福音書記者ルカが読者に伝えたいことがよりはっきりと示されるのではないかと考え、御言葉の取り次ぎをしています。その結果、飛び石を渡るような感じになっていますが、ルカが独自の視点で加えた記事を追うことで説教者であるわたし自身は今までは汲み取れていなかった福音書記者の願いや思いに触れさせていただいているような気がします。今日の「善いサマリア人」もそのひとつです。非常に有名な譬え話ですが、このサマリア人がルカで最初に取り上げられるのは9章51節以下の「サマリアで歓迎されない」という箇所です。これもルカだけが記しているものです。弟子のヤコブとヨハネがイエス様のエルサレム行きを歓迎しなかったサマリアの人々に対して天から火を降らせて滅ぼしてしまいませんかと主イエスに言うのです。これには歴史的事情があって、サマリアはかつてエルサレムと並び立つイスラエルの都のあった場所です。イスラエル王国がソロモン王の死後南北に分裂したとき、北王国はサマリアを都としました。両王国が並び立ったのは100年少しですが、その後、北王国は古代オリエントの覇者であるアッシリア帝国に滅ぼされ、南のユダ王国もエルサレムの喉元まで攻め込まれますが辛くもこの時は難を逃れました。ただ占領地となったサマリア地域にはアッシリア帝国による住民交換によって異民族が多数入り込んだのです。この結果、その後の数百年の歴史の中で生粋のユダヤ人たちはサマリアを避けるようになった。そういう経緯があります。ユダヤ人たちのなかにサマリア人に対するいうならば差別のようなものが存在したのです。そこに切り込むように「善いサマリア人」という譬えをイエス

さまはなさった。これはユダヤ教の立場からすれば「汚れたサマリア人」という考えが歴史的に刷り込まれた人々にとっては衝撃でしたでしょう。しかしこれこそ民族や、性別などさまざまな壁となりうるものを越える一致の可能性はキリストの愛であることを示すものです。律法の求める愛の働きに身を添わせることの出来なかったユダヤ人の祭司、レビ人に対して、このサマリア人の善い働きが置かれることによって、律法を持っているかどうかは尊いのではなく、律法に生きていることが尊いのであり、それにはユダヤ人、サマリア人の区別はないというイエス様のメッセージが浮かび上がります。そしてそれはこのエピソードを記した福音書記者ルカの確信、福音はすべての人を救う。主イエスの愛はすべての人を生かし、新しく結び合わせるといふ神さまの恵みのご支配に対する確信にもとづくものでした。福音書記者ルカはこのあと使徒言行録も執筆しますが、主イエスが天に昇られたのち、約束の聖霊が降り、地中海各地に福音が述べ伝えられていったさまを1章8節に「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と記すのです。サマリアも神の恵みのご支配から洩れていない。ここへつながってゆく箇所として、「善きサマリア人」の譬えは、律法の専門家だけでなく、弟子たちの偏った思いを打ち砕くためにも語られたと見るべきではないでしょうか。

さて、この有名な譬え話は、ある律法の専門家がイエスさまを試そうとして「先生、永遠の命を受け継ぐためには何をなすべきでしょうか」と訊いたことに始まります。これに対して、イエスさまは律法には何と書いてあるか、あなたはそれをどう読んでいるかと問い返します。彼にとっては専門ですから申命

記の中心聖句である「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また隣人を自分のように愛しなさい、と書いてあります」と正しく答えました。イエスさまもそれを認め、正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られると言われたのです。これは100%まっとうな回答であったのですが、100%正しい忠告は実行できないという心理学者の河合隼雄の言葉があるのです。正論なのですが、このまことに正しい純度100%の愛の教えに、わたしは生きられるかという難しい問題があるのです。神への愛と隣人へのまっつき愛を求める律法の教えに、わたしの自己愛が「そんなことはできない!」「そこまでは…」と渋るのですね。この律法学者にはその自覚があった。できていない自分を知っていて、イエスを試すつもりが自分に玉が跳ね返ってきて、痛いところを突かれたと感じて「ではわたしの隣人とは誰ですか」と尋ねたのです。「自分を正当化しようとして」というのは、このできない自分と、こうあるべきだ、こうあらねばならない自分とのギャップ、わたしたちの欠けた部分からこぼれ落ちた言葉です。先週のことですが、わたしはある教会員と不定期ですがショートメールのやり取りをすることがあって、その夜は愛唱讚美歌の話になり、その方が「主よ終わりまで」という歌詞の意味がわかりません。主は永遠の命を約束されました。僕たちに終わりの日があるのですか、と訊いてこられた。これにわたしはこう応えました。死は不可避。しかし復活の希望が約束されています。永遠の命とは、わたしたちに注がれる神の不変の愛の別称と、わたしは理解しています。と送ったところ、わたしも同意しますという返信でした。なぜこの話をしたかという、律法の専門家が問うた永遠の命を得るためにはという、この議論、聖書ではしばしば出てきますが、これがわたしたち

にはピンとこないですね。永遠の命を差し上げますと言っても現代人はいらぬと言うのではないか。100万円差し上げますというなら、わたしも、わたしも！ということになるでしょうが、イスラエルの人々にとって何を差しおいても得たい永遠の命が分からない。これもいろいろな説明ができますが、わたしは、神さまの愛が永遠にわたしから離れ去らない。どのようなわたしであっても、どんな状態であっても離れることがない。見捨てられない。そのことがイエス様の十字架と復活によって明らかになった。この欠けることも、無くなることもないまったき愛が永遠の命だと思うのです。でなければこの後の「善きサマリア人」の譬えが理解できません。

ある人がエルサレムからエリコへ下ってゆく途中、追い剥ぎに襲われます。この状況である人はユダヤ人だとわかります。彼は半死半生の目にあわされて道端に打ち捨てられた。そこへ祭司が通りかかります。エルサレム神殿に行く途中だったでしょうが、倒れた人を避けて通ってゆきます。次にレビ人もやってきますが、これも倒れた人を避けて通ってゆく。これは祭司もレビ人も神殿に仕える職業ですから、血の穢れを忌む。血に触れたら1週間隔離されなければならない。それでは神さまに仕える働きに支障が出るからという理由で避けたのだと言われます。同胞のユダヤ人を助けないことに理屈がつくのです。これが自分の家族であったなら汚れなど構わず、助け起こしたでしょうが、見ず知らずの他人ですから律法を盾にして通り過ぎてゆく。そこにサマリア人が通りかかり、憐れに思い、近づいて傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分の口バに乗せて宿屋に連れて行って介抱をしてあげた。そして翌日になると宿屋の主人にデナリオン銀貨二枚を出して、この人を介抱してください。費用がもっとかかったら帰りがけに払います、と言っ

たという。こう話して、イエスさまは律法の専門家に、さて、あなたはこの二人の中で、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか、とお尋ねになります。その人を助けた人です、と応えると、行ってあなたも同じようにしなさい、と締めくくられました。この律法の専門家はどう思ったのでしょうか。試そうとしたが、返す刀でばっさりという形ですね。問題はここからです。この「善きサマリア人」の譬え話は、多くの場合、あなたも善いサマリア人のように行動しましょうという勧めと理解されます。実際、教会学校や、さまざまな機会に、あなたもこの善いサマリア人のようになりましょうという勧めが無邪気にされてきたように思います。しかし、できるでしょうか。社会のさまざまなルールや、時間に分単位で追われ、自己実現と自己責任に縛られている自己愛に満ちた社会に生きるわたしが、このような無償の愛を生きることが出来るのか。それがまさに律法の専門家の問題であり、わたしたちの問題ではないでしょうか。この譬え話の登場人物で、わたしは自分を当てはめることが出来るのはサマリア人ではなく、追い剥ぎに襲われて半死半生になる旅人です。善いサマリア人とはイエスさまに他ならない。敵を愛しなさいと言われた主イエスだからこそ、憎悪や、歴史的偏見をこえて傷つき倒れた相手を憐れに思って助けることがおできになる。「憐れに思って」というギリシア語は「スプランクニゾマイ」、「スプランコン」＝「内臓」が動詞となったもので腸が震えるような思い、断腸の愛を指す言葉で、新約聖書ではこの動詞は神さまとイエスさまにしか用いられません。油とぶどう酒を傷口に注ぎ、自分のロバにのせ、宿屋に運んで介抱し、足らなければ帰りがけに支払いますと身銭を切って助ける完全な愛を示される方はわたしではない。相手を助ける自分でありたいという出来もしない幻想を抱いて、実際にはその

ように生きることが出来ず、できない自分から目を逸して惨め
ったらしく生きるのではない。あなたはサマリア人ではない。
善きサマリア人とはキリスト・イエスであり、この方に油を注
がれ、ぶどう酒を傷口に塗られ、夜通し介抱され、なおも治療
にかかる負担を負って下さる方がわたしの主であるという、こ
の尽きぬ愛と憐れみこそが永遠の命の実体なのです。律法の専
門家はどうしたら永遠の命を得ることができますか？と問いま
した。主イエスが説き明かしたこの譬えは、まずありのままの
自分を見つめなさい、という招きではないでしょうか。あなた
自身の欠けに目を留め、みずからに敵対する者にも豊かな憐れ
みと愛を注ぎ続ける主イエスに留まり、この方の完全な愛、憐
れみから生ずる愛に生かされること、それこそが永遠の命を得
る道なのです。行って同じようにしなさいというのは、サマリ
ア人のように行動することの前に、まずキリスト・イエスの十
字架の傷跡によって、赦しの愛によって、わたし自身が清めら
れ、慰められ、介抱されている。このキリストの手厚い介護を
受けるものとなりなさいとの招きなのです。そこからしか、わ
たしたちは、神さまの求められる愛に生きることができない。
この信仰の理（ことわり）を弁え、わたしたちのためにご自分
を割いて与えて下さる主の愛を褒め称えたく願います。そして
そこからそれぞれの感謝の応答へ、分かち与える者へと作り変
えられたく願います。

お祈りいたします。